

に通じ浙江の嘉興府界に入る、之を揚子江以南の江蘇に屬する本流とす

浙江の運河は烏程縣の東に於て諸水合流して舊館を經過し、南潯鎮に抵り一たび江蘇の界に入り、東して震澤平望の二鎮を經て嘉興府の運河に合し、德清縣界より流出し石門縣を經て桐鄉縣に入り、皂林鎮を過ぎ斗門に抵り、又東して西水驛に抵る之を西漕河と云ふ、嘉興府城の東隅を出て市河と爲り、東北して杉青閘を出で北漕渠となり、又東北して王江涇鎮を過ぎ江蘇の運河と合す、此運河は太湖及錢塘江に達し、全江より巖州を經て安徽省の徽州府に通ずべし

第一の部即ち江蘇浙江の運河は蛛網の如く、幾百條に分流するを知らず、地方の謠に運河の通せざるの地は江蘇省の外なりと眞に其然るを知るべし、而して上述の運河は其本流にして謂ゆる大運河なり、官船の北漕するもの航を茲に取る、其河幅大約我十五間より一百間にして水深九尺以上を常とす

本流に亞で大なるものは、上海より蘇州に通ずるものにして、此河流は吳淞江にして、上流は崑山縣を經て嘉定縣に至り、本流に合す、支那船の大なるもの、通ずるは人々熟知する所なり

總じて此等の地方は水理の疎通全國無比にして、舟楫を以て車馬に代用するの便あり、到る所小村落と雖も一二の鑿渠ありて皆小舸を通すべし、物貨の運輸行旅の來往は勿論、村落市街子女朋友の訪問一に小舸の便に由らざるなきに反し、陸路は狹隘にして且修繕を爲さざるを以て雨後は泥濘頗る行歩に困り、此鑿渠の水を引き田野に灌漑し耕作を爲すを以て、夏秋の候一望萬頃總て稻田ならざるはなし江南の富饒實に水利に因るものと謂ふべし

第二。揚子江以北臨清州に抵るの運河は、甘泉縣の瓜州口より入り揚州府城及び邵伯鎮を經て邵伯湖の東岸に沿ひ、一帶の隄塘を隔て、運河と相接す、數個の閘門を設けて湖水を通じ河船の通航を爲せり、此湖は邵伯鎮の南我一里半程の處にある淮子河より起つて邵伯鎮の北に抵り高郵州に接続せり

邵伯鎮より荷花塘露筋祠等の地を經過し高郵州城に達し、西南より北折し城壁に沿ふて迂廻せり、界首に抵れば河身漸く狭く二十間に過ぎず、寶應縣を經過し淮安府に到れば一帶の湖水と相接し舟楫を通すべし、湖水は界首汜光寶應白馬等の名あれども大抵相連續せり

淮安府城即ち淮陰侯の古趾は運河の東岸にありて西門は河堤に直接す約我四里十二町にして清江浦とす此地は南北水陸の總匯にして帆樁林立頗る繁盛の地に屬す

老黄河を涉りて楊莊に抵るの間に洪澤湖と老黄河と會流する地あり黄河變流以前に於ては河水の氾濫絶ゆるなきを以て運河の水路困難多かりしと云ふ之が爲め數處に水閘或は土壩を設け水勢を節制せしものなりしが現今老黄河の上流は乾涸して一勺の水を見ず河底は即ち乾田となり高粱麥粟青々たり楊莊は黄河の變流以來運河の一港となり舟車の輻輳亦盛なり此地以北の運河を中運河と云ひ則ち中央部の運河と謂ふ意なり

中運河に入り宿遷縣城を我八町余の西岸に望み九龍王廟を経て皂河に抵る老黄河の流域は運河と併行せしに此に至り方位を變じ老黄河は正西に運河は正北に向へり邳州河莊に於て邳州河は西より來りて運河に入る又沂河沭河等の小流を受く台莊にて江蘇山東の交界とす是より濟寧州に到る間は西岸に一隄を隔て微山湖に接す十字河莊は四邊總て沙丘にして彭口山河來りて微山湖に注入し運河

は其中を貫き十字形を爲す此沙丘は運河開鑿の時人工を以て堆積せしものたり十字形の河身は即ち運河の要點にして南北我二十五町許を距て各水閘あり南北來往の漕船其閘中に入れば必ず之を閉て水を畜へ洩さず地形愈高く水流至淺なるが爲め彭山河水の多少に因て舟行の時間に甚た差違あり

此地は運河水域中最高の地にして水脊と爲す珠梅閘より南陽閘に抵る凡我十一里半の間は湖水の中央に隄防を設けて水路を爲す東を獨山湖と云ひ西を昭陽湖とす獨山湖は黄河變流以來已に乾涸して沼澤或は田園となり魯橋に抵りて僅かに泗水に注ぐ此河より兗州府に通すべし

濟寧州より新黄河の南岸十里鋪に抵るの水路は獨山湖と南旺湖の湖畔に風浪を避け安全を要する爲めに隄防を築起するは南陽閘近傍と同じ寺前閘より我二里六町の分水口に於て汶水を引き運河の水量を増加せり土人の説に因れば十字河以北は運河の水流定方なく或は南流し或は北流す十里鋪は新黄河と運河と會するの地點にして元と荒蕪の地たりしも黄河變遷以後一の市街を爲すに至れり新黄河の幅は此處にて凡我半里餘とす

運河口は新黄河の西岸にして、黄河の水を受くるを以て、時として怒濤の爲めに破壊せられ、泥土涇没して水路乾涸すること多し、東昌府城の東南角は隄防を隔て、運河に對せり、徒駭河、馬頰河等の小流あつて運河に注ぐ、臨清州は南東の運河と衛河との會合點にして、是より以北衛河の一線を以て運河と爲し、天津に達す、臨清州は運河の一大港たり、然るに黄河の變遷以來水量を減じ舟運を阻礙するを以て、隨ふて其通商大に衰退を來せり

第二部に屬する運河の地勢は揚子江より淮安府に抵るの間は、地形總て江南に類似し水利も亦宜し、邵伯湖を過ぐれば地勢漸く變じ急、北するに従ひ水利の交通少く灌漑溝の如きも其數を減じ、水田を見ずして乾田を見る、山東省域内に入れば地勢漸々高く、人工を以て河水及湖水を引き、其水量を増し運河の水量を充溢せしむ、沿岸民戸の富庶も江蘇省域内に讓ること數等とす、之を史に徵するに明の永樂九年工部尙書宗禮は、汶上の老人白英の策を用ひ、河水を導き南旺に出てしめ、之を中分して二道と爲す、其南流して江蘇に入るもの十の四、北流して臨清州に達するもの十の六、南旺は地勢高きを以て南北より皆注ぎ、所謂水脊なるを以て閘を置き水

を貯へ山東の運河を爲せりと云ふ、即ち臨清州以北新黄河に抵るの間を以て運河最高の地點とす、然るに、較近新黄河の水勢排洩して汶水の北流するものを壓抑し泥沙游塞して水路を害し、運河中一の障礙と爲るに至れり

第三、臨清州より以北天津を経て北京に達するの運河は、臨清州の西門外に於て衛河と會し、北流して武城、故城の二縣を通過し、四女寺に抵り、此地に河道一線ありて東方に走り海に入る、現今は填塞して水全く涸る、德州の西北我十町餘にして、燒鍋市あり、河船の碇泊に便なり、桑園鎮を経て直隸省の界に入り、東光縣、滄州、青縣、唐官屯、靜海縣、濁流鎮、楊柳青等の地を經過し、紅橋の下に抵り、白河に入る、白河は通稱して海河と云ふ、又一に河流屈曲多く九拾九曲ありて百に足らざるを以て一を減じて白とす、是なる否やを知らず、此運河水路は開鑿渠にあらずして、衛河の一線に由れり、然れども、此支流は一つも漕運に便なるもの少し、只唐官屯の南より大站小站を経て、鹹水沽を過ぎ、太沽に於て白河に入る、一河あるのみ、地方の人稱して小海河と云ふものあり

天津より北京に通ずるの運河は、即ち白河の上流にして、古名は潞河と稱す、所謂る

北運河是れなり天津より湖涸して通州に抵り此より大通河を沂つて北京に達す大通河一に通惠河と云ふ玉泉山の昆明湖に發源し海甸よりして北京城内に入り是を玉河と云ふ城濠の水利を爲し東便門の水關を出て大通橋に漚し前述の大通河となる此運河水路は人工を以て水利を起し壩扉五個を設け水を節し北京の漕運を濟すものなり

此第三部に屬する運河は衛河の北流するものにして水量に富み第二部に屬する地方に於ける如き乾涸且游塞の害少し其水勢亦急なり來往の河船臨清州より天津に至る七日を費し天津より臨清州に至る十五日を要するが如きを以て之を知るべし衛河の兩岸は田野開らけ道路廣くして車馬の通行に自在なり河岸の地は人烟繁盛にして碇泊に便ならざるはなし此運河は隋代に於て永濟渠と稱し宋の皇祐初年一たび黄河の水道となり黄河復た南徙するに及んで衛河は故の如し金元以來皆是に由て北地の漕運を濟すされば支那政府の政事に經濟に民庶と共に重きを置く所なり

果して然らば吾人は此運河の水利を研究し倍保存改修して内地交通の利便を興

起せずばあるべからず蘇杭の運河既に大東汽船會社の手を下すあり瓜州以北遠た人の説くものなし要は吾人と支那紳董連合の下に一大會社を組織して興利を策せん乎九泉の下場帝をして其心を得せしむるの寧馨兒焉くにある由來大業人の知るなし嗚呼

蘇浙小觀終

15/9/37

明治三十六年六月七日印刷
明治三十六年六月九日發行

定價金七拾錢

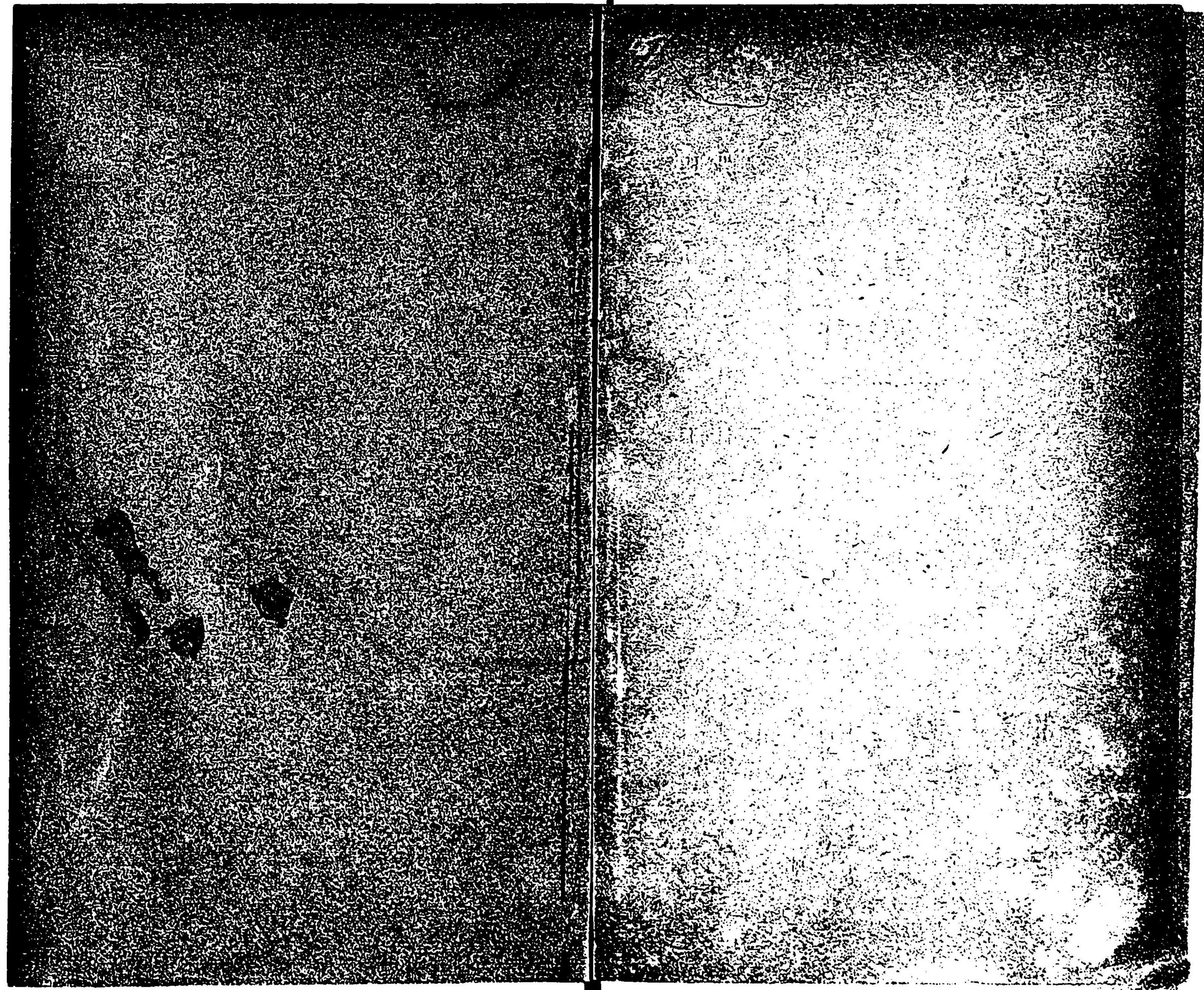
不許
複製

編者 遠山景直
全者 大谷藤治郎
發行者 遠山景直
印刷者 東京市下谷區上野町三丁目二十番地 石丸釜之助
印刷所 東京市下谷區上野町三丁目二十番地 榮舍

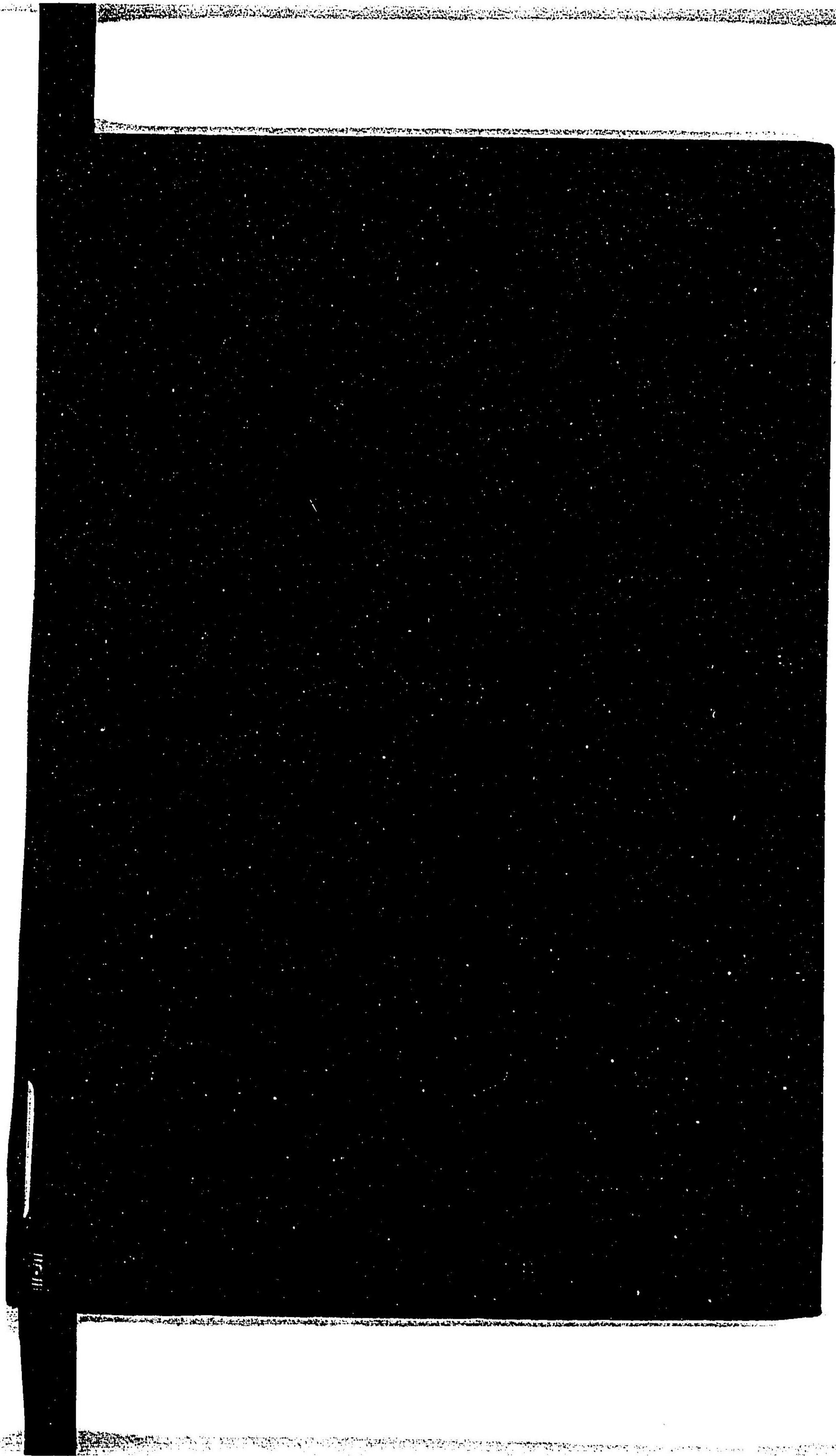
發行所
大賣捌所
賣捌所

東京市京橋區五郎兵衛町二十二番地
東京市京橋區銀座二丁目九番地
日本橋區通一丁目 大倉書店
同 通三丁目 九善書店
本郷區本郷四丁目 文明堂

江漢書屋
服部書店
同 神田區表神保町 中西屋書店
同 京橋區銀座二丁目 東京堂



711
304



74
304

026579-000-6

74-304

蘇浙小觀

遠山 景直/編

M36

ADD-0258



